

・ 訳者あとがき

筆者のアンガス・ライトは、カリフォルニア州立大学の名誉教授であり、ラテンアメリカ史と「抵抗の地理学」が専門である。ウエンディー・ウォルフォードは、コーネル大学社会学部の教授であり、開発社会学が専門である。彼らは、土地なし農民運動の当事者に対して聞き取り調査を実施した。筆者らは、土地なし農民運動の目標は、「広い知識があり、教育のある、活発な一般大衆の形成」であり、「都市の街路やスラム街での生活につきまとう危険から解放されること」と述べる。

現在のブラジルには、土地なし農民運動から派生した幾つかの運動が展開する。例えば、空いた建物を占拠するのは、センター（屋根なし労働者運動）である。サンパウロ市の日系人街を歩いていた時に、建設途中で放棄されたビルで人々が演説するのを見て、丸山浩明先生にそう教えていただいた。サンパウロ州のある日本人入植地では、入植の記念になるような古い建物でも、何処かの誰かが住み着いてしまうため、残しておけないと聞いた。

誰の意見を聞くかによって、土地なし農民運動の印象は異なる。私の場合、農場主への聞き取り調査が多かったため、多くの情報を得られなかったが、例えばマット・グロッツ・ド・スール州の場合、運動のアセンタメントは家族あたり20haに達する。そのため、州都の近くにある小規模な日本人入植地で運動が始まった時には、相当の交渉をして運動を止めてもらったと聞いた。一方、遠隔地のパンタナールには、1万haを超える大農場が幾つもあるが、テント生活ができるような環境にないので、土地なし農民運動を見たことがなかった。

訳者の山本先生は、静岡県の農家の出身であり、日本の農地改革を身を以て知る世代である。

「訳者あとがき」では、ブラジルの土地なし農民運動と日本の農地改革を比較した考察が興味深い。

(仁平尊明)

文 献

松本栄次著・撮影（2012）：『写真は語る：南アメリカ・ブラジル・アマゾンの魅力』二宮書店。

丸山浩明編（2013）：『世界地誌シリーズ6：ブラジル』朝倉書店。

菊地俊夫・松村公明編著：『文化ツーリズム学（よくわかる観光学3）』朝倉書店，2016年3月刊，184頁，2,800円（税別）

本書は朝倉書店の「よくわかる観光学」シリーズの一つであり、『観光経営学』『自然ツーリズム学』に続く第3巻として刊行された。17名の研究者が異なる専門分野、様々なアプローチを通して「文化ツーリズム」を解説する。

本書が対象としている「文化ツーリズム」とは、「人口の構築物や無形の芸能、異国民などの生活様式などを鑑賞・訪問することによって発生するさまざまな事業」を指し、有形・無形の観光資源が「文化ツーリズム」の対象となる。文化ツーリズムの対象を「人間の手が入って創りあげられた」資源と捉えると、人が管理に関わる自然資源を含めて文化ツーリズムの対象であり、幅広い、多様性のある概念である。それゆえ、本書では人文社会科学のみならず、土木工学・建築学・都市工学など計画系分野のフレームワークとアプローチの解説にも重きを置いており、既刊の観光学入門書で取り扱われなかった「まちづくり」の視点が目次構成に反映されている。

本書の構成は、「周辺領域からの視点編」「コンテンツ編」「計画学からのアプローチ編」の3部

からなる。「周辺領域からの視点編」では、文化ツーリズム学の基礎分野となる地理学、社会学、文化人類学、建築学、都市工学・都市計画の視点から、理論的な枠組みやアプローチが解説されている。地誌学の枠組みの中で発展した観光地理学研究(2章)は、観光目的地の立地やその変遷に着目し、観光地の地域的差異や空間的な特性について明らかにしてきた。一方、社会学(3章)の議論では、文化をツーリズムの対象とすることで、文化と観光の関わりが密接になり、伝統工芸が土産品として加工されるなど、次第にツーリズムのための「文化」(観光文化)が出現しており、文化の生産と消費をめぐる問題を指摘する。このような状況と関連して、文化人類学では(4章)、観光が関わることで表象化された「偽りの文化」と「真正な現地の文化」とを対比し、文化の構築性、政治性について議論する。昨今のインバウンド観光で改めて再認識するようになった「日本文化」という言葉もまた、日本の文化像がいかなる経緯で形作られたのか、文化の観光資源化を考える一つの視座となる。計画系の基礎分野として建築学(5章)では、建築工法やデザインの変化、都市計画との関係性を読み解く。近年では、個々の建築デザインがアート(芸術)として評価され、建築が「観る」対象として捉えられていること、一方で建物の奇抜さや醜悪さ、空虚感が観光の対象となることもある。廃墟をめぐる観光等が注目されているが、筆者の「人々が何に興味をもつか分からない」という指摘は、建築物が本来もつ機能以外への関心が、文化ツーリズムの対象を広げつつあることを予見させる。都市計画(6章)では、都市計画や住民参加によるまちづくりのデザインが、着地型観光やまちを舞台にしたイベント事業をつくるなど、文化ツーリズムを推進していることを明らかにした。

第2部となる「コンテンツ編」では、文化ツー

リズムで注目すべきトピックとして、ヘリテージツーリズム、聖地巡礼、都市観光、スポーツ観光の研究事例が取り上げられている。「ヘリテージツーリズム」(7章)では、ベトナム・ホイアンが世界遺産登録に至った背景を踏まえ、世界遺産登録やそれに伴う観光化を境としたホイアンに対する表象の変化を考える。旅行ガイドブックを読み解くことで、「受け継がれるべき遺産」が観光と関わり、ノスタルジーが強調して語られるプロセスが理解できる。「聖地巡礼」(8章)では、伊勢参宮や四国遍路など聖地や霊場を巡って参詣する多様な巡礼とそのモデル構造が解説される。上記のような宗教的な聖地を巡る聖地巡礼に対して、アニメ聖地巡礼は分けて語られることが多いが、本書では観光をめぐる一つの流れの中で両者を解説し、現代人にとっての「聖地」の意味を問いかけている点は大変興味深い。「都市観光」(9章)では、都市観光研究の系譜を踏まえた都市観光の特性や発展要因が論じられている。コラムで取り上げられたパレードもまた、都市の多様な観光対象の一つであり、人々の回遊行動を広げ、愛らしい動物のオブジェが都市イメージを向上させるなど、新しい文化の創出契機となっている。このような都市と観光との関わりを「スポーツ観光」(10章)を通してみると、サンディエゴの都心部では、球場やコンベンションセンターを利用する観光客の経済的波及効果が、都市再開発に影響を与えていることが分かる。球場に隣接する地点で実施した定点観察とその詳細な分析は、スポーツ観戦や買い物を目的とした人の流れが集まれば、都心回帰をも後押しする可能性を示唆している。

第3部となる「計画学からのアプローチ編」では、土木工学や建築学、都市工学、地理学の視点から、都市形成史、交通計画、展望タワー(高層建造物)、歴史的環境保全の四つを取り上げて論

じる。まず「都市形成史」(11章)では、東京の観光化を江戸時代から現在まで通時的に概観する。江戸・東京は、幕府創設以来、人口の増加・定着と社会経済的な状況が複雑にからみあいながら常に新しい都市文化を発信続けており、都市形成において文化ツーリズムの発展が重要な役割を担っていることが理解できる。「交通計画学」(12章)では、文化ツーリズムの観点から交通システムの変遷、交通の需要、交通事業者の特性などが解説される。新たな需要として、観光地の交通システム自体を観光資源化する動きが注目され、近年流行している豪華車両の導入や道路沿いの景観資源の活用など、ストーリー性のある商品開発の実践から、文化ツーリズムとの関係性が分かる。「展望タワーと都市観光」(13章)では、近代の観光で「見る」体験が重視されるようになり、展望タワーが発展した歴史が論述される。近年ではスカイツリーを代表とするタワーが都市観光の象徴となり、旅行商品には欠かせない観光資源となっていることが明らかとなった。また「歴史的環境保全」(14章)では、観光が歴史的環境保存の脅威となる反面、その開発が地域経済活動を支えている点を指摘する。一方で、近年の「観光まちづくり」に関わる実践のように、地域住民によって新たな価値を見出された文化資源がニューツーリズムに活用されており、地域環境を維持しつつ持続的な観光を見出す可能性が提示された。最後に「文化ツーリズムの可能性と課題」(15章)では、青梅市商店街のアートフェスティバルの事例を通して、地域資源とその活用主体との関係性について論じる。持続的なまちづくりと文化ツーリズムの展開には、担い手の組織化が必要であり、複数の主体が連携して地域資源を活用・管理する手法(マルチチャンネル型)が望ましいとされる。

以上が私見を交えた本書の概要である。本書は

冒頭で、「文化ツーリズム」を人文的な資源を対象とした鑑賞・訪問により発生する「事業」として定義したことで、本書の特色であるまちづくり等の計画系の議論の理解がより一層深まった。一方で、「事業」という言葉に読者が固執してしまうと、社会現象としての観光、観光をめぐる表象、観光を通じた文化の真正性、聖地を巡る観光客の実存的行為など、ゲストのまなざしを通して文化ツーリズムの諸相を考える際に、理解が難しい点もあった。本書を読み進めれば、各基礎分野における「文化ツーリズム」の定義は異なっており、これこそが学際的なアプローチを可能にする文化ツーリズム研究の面白さとして伝わってくる。その点を踏まえ、最後に、各章末に配されたコラムに注目したい。コラムでは、ミステリー小説の舞台(列車や客船)から当時流行した旅の実像を読み解き、永井荷風の随筆から東京復興計画を考える手がかりが提示される。「戦争遺産」をめぐる観光、都市や建築物を「ステージ」に変えるイベント、交通移動の価値観を変える「鉄道ファン」の存在など、いずれも大変興味深い視点から「文化ツーリズム」が語られる。その一つとして紹介された事例として、調査先で観光ガイドに出会う場面は、研究者が少なからず経験するようになった現象である。観光ガイドが「現地の人々の生活に関する知識を、外部者に向けて加工し、翻訳するという作業をおこなっているようにみえる」という本書の指摘は、私たち研究者もまた「観光の場」に関わっているという、見落としがちな気づきを与えてくれた。コラムは、各章の論考を理解する助けとなっており、このような動向・実践に目を向けることが、日々変化する「文化ツーリズム」の多様な形態を捉える糸口であることを教えてくれる。観光研究を志す学生・研究者に、ぜひ手に取って一読して欲しい。

(井口 梓)